

2016年7月10日 礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記21章1～9節

説教：何によって償うことができるのか

1 誓い1 ヨシュアとギブオン人の誓い  
(ヨシュア記9章)

1) きぎんと罪

ダビデがイスラエルの王として活躍したのは、紀元前およそ千年のころのことです。ここまでいろいろな試練はありましたが、やっとイスラエルは一つの国として落ち着きを取り戻していきます。

そんなときまた新たな問題が起きます。きぎんが三年にわたって続いたというのです。日本でも私の親の世代あたりまでは、非常に厳しいきぎんがしばしば起こったと聞きます。ひどい時には農家は自分の食べる米にも困り果て、若い娘を売って生き延びたという話もありました。

イスラエルも同じです。ダビデは王としてこの困難に向き合わなければなりません。そこで主に伺いを立てます。主からの答えはこうでした。1節。「サウルとその一族に、血を流した罪がある。彼がギブオン人たちを殺したからだ。」

今の時代、もしきぎんが起きたならどうするでしょうか。雨が降らなくてきぎんになったというのなら、雨が降らない理由を気象の専門家が説明します。人の罪が原因であると言う人はほとんどいないでしょう。ですからここを読んで、大昔の人たちは迷信深く、残酷なことを平気でやる愚かな人たち、と笑うかもしれません。

でも聖書はためらわずに、きぎんと人の罪は密接に関係があると指摘します。その罪が償われなければ、土地は祝福を受けることが

できない。けれども、もしその罪が本当に償われた時、私たちが住むこの世界は神の祝福を受けることができる。この世界は、そのようにできているのだと言うのです。ダビデはそのことを信じ、神の声に従っていきます。

2) ギブオン人と盟約を結んでいた

ここにギブオン人の名前が出てきて、この人たちのことについて2節に少し説明があります。話はさかのぼって、ヨシュアがイスラエルの民を率いて約束の地に足を踏み込んだあたりのことです。ダビデの時から数えればおよそ四百年前のこと。あるとき地元に住んでいたギブオン人が変装をしてやって来ました。イスラエルには神がついていて、戦ってもとても勝ち目がない。さりとていきなり出て行ったなら殺されかもしれない。それで自分たちは遠くに住む者だというふりをし、外国人だけれどもイスラエル人と同じとみなすというそのような盟約を主の前で結んだのです。ところが後になって、ギブオン人にだまされことが発覚し大騒動になってしまう。それでも結局、主の前に誓った以上、絶対に彼らを殺す事はできないという結論になりました。

それから四百年経ったとき、サウル王とその一族は、この契約を無視してギブオン人を殺してしまいます。こうしてギブオン人との契約を破ってしまったその罪のためにいまきぎんが止まないのだと、主は言われました。おそらくサウルが敵と戦っていた時にギブオン人も巻き添えにして殺してしまったと

いうことでしょう。戦争だから多少の契約違反はやむを得ない、ということにはなりません。どんな事情であっても罪を犯した者の責任は免れません。しかしそのサウルは死んでしまいました。日本の刑法によれば犯人が死ねば、それ以上罪を問うことができない仕組みになっています。犯人の家族が代わりに刑に服すると言うことはあり得ません。しかし聖書は違います。サウルが死んだ後でも、なおその罪のためにイスラエルはききんという形で苦しみを受けなければなりません。いったいどうしたらよいのでしょうか。

## 2 誓い2 ダビデとヨナタンとの誓い(第一サムエル記 20 章 16 節)

### 1) 問題を処理する原則：償う必要がある

ダビデの立場は複雑です。会社組織に例えれば、前任者が引き起こした問題を、後を継いだ自分が処理しなければならぬ、そういう立場です。こんな場合、文句は言われることがあっても、ほめられることはほとんどないでしょう。でも、主のゆずりの地が祝福されるためには、だれかが行動するしかありません。ダビデは、イスラエルの王としてこの役割を引き受けます。

どのように処理したか。彼は一つの原則を頭に思い描いています。3 節。「あなたがたのために、私は何をしなければならぬのか。私が何を償ったら、あなたがたは主のゆずりの地を祝福できるのか。」

神の義が曲げられたとき、何かで償う必要がある。それがダビデの考えていた大原則です。ダビデの質問に対しギブオン人は答えます。5, 6 節。「私たちが断ち滅ぼそうとした者、私たちが滅ぼしてイスラエルの領土のどこにも、おらせないようにたくらんだ者、そ

の者の子ども七人を、私たちに引き渡してください。私たちは、主の選ばれたサウルのギブアで、主のために、彼らをさらし者にします。」

厳しいことばに感じます。サウルの一族からひどい目に遭わされたので、これを機会に復讐を果たそうとしているのかとも疑います。でもダビデはギブオン人の言い分は正しいと認め、引き渡す約束をします。

約束はしましたが、そんなに簡単な話ではありません。そもそもサウル家とダビデとは犬猿の仲です。ダビデがサウル家の者に対して、「あなたがたの一族がかつて犯した罪を償うために、いますぐに七人の子どもを差し出しなさい」と言っても、はいそうですかと簡単に応じられとはとても思えません。

### 2) ヨナタンと誓っていた

しかしダビデが悩んだのはこのことではなく別のことでした。7 節にあります。「しかし王は、サウルの子ヨナタンの子メフィボシェテを惜しんだ。それは、ダビデとサウルの子ヨナタンとの間で主に誓った誓いのためであった。」

このことは少し説明が必要です。話はおおよそ四十年前にさかのぼり、ダビデがまさサウルに仕えていたときのことです。そのサウルはダビデを憎み殺そうとしていました。ところが皮肉なことですが、サウルの息子であるヨナタンとダビデとは大の親友でもあったのです。ヨナタンはサウルの長男ですから、次のイスラエルの王となる立場にあります。しかしヨナタンは、信仰によってダビデが次の王となることを確信します。それは何を意味するか。近い将来、戦いで父サウルが死ぬ。いやそれだけではなく自分も死ぬというこ

とを意味します。そしてサウル家とは関係のないダビデが王となる。そんな場合、当時の習わしによれば、サウル家は全員皆殺しにされることとなります。

ヨナタンは自分が死んだ後のことを考え、親友ダビデにお願いをします。あなたが王となった時は、「あなたの恵みをとこしえに私の家から断たないでください。」ダビデはこれを聞き、ふたりは主の前に誓います。それが第一サムエル記 20 章に出てきます。

その後、ダビデはヨナタンの預言のとおりイスラエルの王となります。王となってもヨナタンとの誓いは決して忘れません。国が少し落ち着いてきた時ヨナタンの子どもメフィボシエテをわざわざ捜し出し、自分の家族同然に迎えました。そのようにしてヨナタンとの誓いを果たしていきました。

ギブオン人の問題でダビデがもっとも悩んだのは、このヨナタンとの誓いのことです。ギブオン人に差し出すサウル家の子どもの一人に、ヨナタンの子であるメフィボシエテが入ってしまったのです。

### 3 主のゆずりの地

#### 1) 誓いは破られてはならない

おわかりのとおり、今日の箇所は二つの誓いが深く関係しています。一つ目は、ヨシュアがギブオン人と立てた誓い。二つ目はダビデがヨナタンと立てた誓い。ききんから逃れるためにはサウルの犯した罪を償う必要があったのですが、このことを実行しようとすると、主の前で誓った二つの誓いが真正面からぶつかってしてしまうのです。どちらも大切な誓いです。主の前で誓われたものである以上、どちらも絶対に破られてはなりません。どう見ても矛盾です。いったいどうしたら、

この矛盾が解決できるのか。ダビデはどうしたのでしょうか。

#### 2) 二人のメフィボシエテ

8 節に、最終的に選び出された七人の名前があり、そこにメフィボシエテの名前があります。これを見た時、ダビデはヨナタンとの誓いを破りメフィボシエテを差し出したのか、私はそう思いました。しかしよく読むと「アヤの娘リツパがサウルに産んだふたりの子アルモニとメフィボシエテ」とあります。リツパはサウルの側室です。ということは、このメフィボシエテは同じ名前ですがヨナタンの子どものことではなく別人です。何度も確認しましたが、別人であることに間違いありません。

いったい何が起ったのか。単なる偶然でしょうか。いいえそんなはずはありません。神があらかじめ備えてくださっていたということではないでしょうか。主の前に誓われた二つの誓いが破られることのないように、あらかじめサウル家の中にふたりのメフィボシエテを与えていた。私にはそうとしか思えません。

ダビデは、本来ならヨナタンの子メフィボシエテを差し出すべきでしたが、同じサウル家のもう 1 人のメフィボシエテを差し出すことで、この問題を乗り越えたということです。

#### 3) キリストによって罪が償われる時

詭弁と言うのでしょうか。だまされたような気がすると言うのでしょうか。でも大切なことは何でしょうか。主の前に一度誓われたことは、どんなに昔のことであろうとも、どんな事情が起ころうとも決して破られてはなら

ない。そのためには神は何でもされるということではないですか。

サウルの罪が償われるためにサウル家七人の子どもが死ぬことになりました。私たちの罪はいったい誰が償うのでしょうか。神は私たちの罪をご存じです。私たちの罪は本来なら自分で償わなければなりません。償うためには死ななければなりません。しかし、主はどうしたか。ギブオン人はどういう扱いを受けたかを見てください。彼らは本来死ぬべき者たちでしたが、救われるために強引とも思える方法を使って主の前で盟約を結びました。それでも盟約は有効とみなされました。

私たちも同じです。どんな罪を犯したとしても、主と救いの契約を結んだ者は絶対に殺されてはならない。あなたは主のゆずりの地から滅ぼされてはならない。神はそう言うてくださる。誤解を恐れずに言えば、ある意味でこれは強引とも思える理屈かもしれません。それでも契約は有効です。

そのとき、一つだけ問題が残ります。私たちの罪が赦されるためには、誰かが代わりに償わなければなりません。ダビデは言いました。「私が何を償ったら、あなたがたは主のゆずりの地を祝福できるのか。」これと同じようにして主は言われました。「あなたがたの罪のために、わたしはいのちを捨てます。だからあなたがたも救いという主のゆずりの地を受け継ぎなさい。」

そのようにして今私たちは、主のゆずりの地に迎えられそこで祝福を受け継ぐ者となりました。その恵みを覚えたいと願います。